

# 東京女子体育短期大学学生のライフスタイルと健康に関する調査報告 その2

## —精神的健康に関する基礎調査—

The Lifestyle and Health of the Students of Tokyo Women's Junior College of Physical Education 2  
—Reports on their Mental Health—

久芳 美恵子 服部 次郎 八尾 泰寛 田中 洋一  
若山 章信 鈴木 政之 鶴沢 文子 中本 哲

KUBA Mieko HATTORI Jiro YAO Yasuhiro TANAKA Yoichi  
WAKAYAMA Akinobu SUZUKI Masayuki UZAWA Ayako NAKAMOTO Akira

### I 本研究の概要

大石・浅見・奥野・渡辺・若山・今丸・中本(2007)「東京女子体育大学学生のライフスタイルと健康に関する調査報告 その2」(以下、「その2」)では、東京女子体育大学学生(以下、学部学生)の精神的健康に関して報告した。本稿では、東京女子体育短期大学学生(以下短大生)の精神的健康に関する諸指標の集計結果を報告し、その精神的健康の様態について検討する。

精神的健康に関する分析に用いた5つの指標は、「その2」同様以下のものである。「大学生生活不安尺度(藤井、1998)」、「対人恐怖心性尺度(堀井・小川、1997)」、「多次元自我同一性尺度(谷、2001)」、「Kiss-18(Kikuchi's Social Skill Scale 18項目版(菊池、1988))」、「集団同一視尺度(Kawasawa,1991)」。

### II 本研究の目的

「その2」で学部学生の精神的健康に関して報告をしたが、本稿では短大生における学科や学年、による比較を行なう。

特に、学科別の比較からは、専攻の違いによる学

生の特徴を知ることができる。

さらに、「その2」による学部学生の結果と短大生のそれを比較することにより、双方の特徴を捉えることができる。

これらのことから、本学が学業や部活動などの学生生活を通じて心身の発達を促し、愛校心を持ったより有能な卒業生を社会に送り出すための基礎資料を得ることを、本研究の目的とする。

### III 方法

調査回答者 東京女子体育短期大学学生 567名(保健体育学科235名、児童教育学科332名)

学科別・学年別内訳:

保健体育学科1年生118名、2年生 117名

児童教育学科1年生174名、2年生 158名

調査時期 2005年11月1日～30日

### IV 結果および考察

学部別・学年別による比較

1 大学生生活不安について(Table1-1,1-2)

保健体育学科では、大学における日常生活への不安を表す「日常生活不安」および「評価不安」「大学不適應」で1年生が2年生よりも高い。特に

	1年生 (N=118)			2年生 (N=117)			全体 (N=235)			t値
	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	
日常生活不安	33.25	6.27	88	31.49	7.16	107	32.28	6.81	195	1.809 n.s.
評価不安	27.91	7.03	45	26.2	6.32	100	26.73	6.57	145	1.456 n.s.
大学不適應	10.22	3.81	116	8.64	3.41	111	9.44	3.69	227	3.283 >1

Table1-1 大学生生活不安尺度の各指標に関する学年別集計 (保健体育学科)

	1年生 (N=174)			2年生 (N=158)			全体 (N=332)			t値
	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	
日常生活不安	31.95	6.13	121	31.19	5.83	128	31.56	5.98	249	1.006 n.s.
評価不安	27.94	6.61	141	26.35	5.99	150	27.12	6.34	291	2.161 n.s.
大学不適應	10.63	4.01	174	9.48	3.8	156	10.08	3.95	330	2.656 >1

Table1-2 大学生生活不安尺度の各指標に関する学年別集計 (児童教育学科)

	1年生 (N=118)			2年生 (N=117)			全体 (N=235)			t値
	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	
自分や他人が気になる	18.48	6.74	117	17.3	6.66	111	17.9	6.71	228	1.331 n.s.
集団に溶け込めない	16.71	7.5	117	15.3	7.05	114	16.01	7.3	231	1.472 n.s.
社会的場面で当惑する	16.93	7.78	118	16.47	6.76	113	16.71	7.29	231	0.482 n.s.
視線が気になる	14.09	7.21	116	13.63	6.33	115	13.86	6.78	231	0.525 n.s.
自分を統制できない	15.82	5.82	117	15.65	5.75	114	15.74	5.78	231	0.225 n.s.
生きていることに疲れ	16.18	6.46	116	14.85	6.54	112	15.53	6.52	228	1.548 n.s.

Table2-1 対人恐怖心性尺度の各指標に関する学年別集計 (保健体育学科)

	1年生 (N=174)			2年生 (N=158)			全体 (N=332)			t値
	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	
自分や他人が気になる	17.71	6.98	170	17.72	6.03	156	17.71	6.53	326	0.25 n.s.
集団に溶け込めない	15.51	7.18	169	15.12	6.33	155	15.32	6.78	324	0.512 n.s.
社会的場面で当惑する	16.74	7.41	168	16.32	6.78	155	16.54	7.11	323	0.532 n.s.
視線が気になる	13.65	6.76	169	12.46	5.81	154	13.08	6.34	323	1.681 n.s.
自分を統制できない	17.03	6.41	170	15.83	5.48	154	16.46	6.01	324	1.799 n.s.
生きていることに疲れ	15.88	6.54	169	15.25	5.7	154	15.58	6.16	323	0.908 n.s.

Table2-2 対人恐怖心性尺度の各指標に関する学年別集計 (児童教育学科)

「大学不適應」では有意差 ( $P < 0.001$ ) がみられた。

児童教育学科では、「日常生活不安」では学年差はあまりなかったが、「評価不安」および「大学不適應」では1年生が2年生よりも高い傾向にあり、保健体育学科同様、「大学不適應」では有意差 ( $P < 0.001$ ) がみられた。

「大学不適應」における学年差は、1年間といえども短大での生活を体験することにより学生生活に適應してゆくことを示しているといえるだろう。一方、「日常生活不安」は児童教育学科より保健体育学科で学年差がある傾向にあった。このことは、児童教育学科は大学へ自宅から通学圏内の学生が約83%であ

り、一方保健体育学科のそれは約69%となっている。自宅通学生以外は、寮や下宿から通っているが、多くの学生にとって家を離れることが初めての経験であり、そのことが大学における日常生活における不安の高さにつながっていると思われる。このことは、自宅からの通学圏内が約56%と保健体育学科より低い学部学生(「その2」)も同様の傾向である。

## 2 対人恐怖について (Table 2-1, 2-2)

保健体育学科では、「自分や他人が気になる悩み」および「集団に溶け込めない悩み」において1年生が2年生よりも高い傾向にある。このことは、1年生は大学での人間関係にまだ慣れていないことが影響して

	1年生 (N=118)			2年生 (N=117)			全体 (N=235)			t値	
	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N		
自己斉一性・連続性	16.09	6.78	117	14.78	6.33	115	15.44	6.58	232	1.522	n.s.
対自的同一性	20.56	4.68	117	21.05	4.43	114	20.81	4.55	231	0.815	n.s.
対他的同一性	18.6	4.62	118	18.15	4.2	111	18.38	4.42	229	0.767	n.s.
心理社会的同一性	18.47	3.62	116	18.82	2.92	114	18.64	3.29	230	0.809	n.s.

Table3-1 多次元的自我同一性尺度の各指標に関する学年別集計 (保健体育学科)

	1年生 (N=174)			2年生 (N=158)			全体 (N=332)			t値	
	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N		
自己斉一性・連続性	16.41	7.11	170	15.87	6.28	151	16.16	6.73	321	0.714	n.s.
対自的同一性	21.74	3.99	169	21.57	3.86	155	21.66	3.93	324	0.378	n.s.
対他的同一性	18.12	4.74	172	18.25	4.1	155	18.18	4.44	327	0.25	n.s.
心理社会的同一性	18.52	3.21	170	18.39	2.7	150	18.46	2.98	320	0.373	n.s.

Table3-2 多次元的自我同一性尺度の各指標に関する学年別集計 (児童教育学科)

いると思われる。

また、「社会的場面で当惑する悩み」および「視線が気になる悩み」、「自分を統制できない悩み」では学年による差は見られなかった。

一方、「生きていることに疲れる悩み」は1年生が2年生より高い傾向にあった。このことは、「その2」でも指摘しているように、「運動部の活動では上下関係の厳しさや下積みの仕事等の負担があることが原因と考えられる。」

児童教育学科では、「自分や他人が気になる悩み」および「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」、「生きていることに疲れる悩み」では学年間で差が見られなかった。一方、「視線が気になる悩み」と「自分を統制できない悩み」では1年生が2年生より高い傾向にあった。

対人恐怖心性では、1年生より2年生で低い傾向がみられた。保健体育学科の結果は「その2」の学部学生の結果と同様な傾向であった。しかし、保健体育学科と児童教育学科を比較すると、異なる点があった。保健体育学科の結果が学部学生の結果と同様であることから、学部学生であれ短大生であれ体育を専攻する学生と、保育・教育を専攻する学生の対人恐怖心性の違いがあると思われる。学生への対応では基本線では同一であっても、細かな対応では専攻学科により対応を工夫する必要があるのではないだろうか。

### 3 自我同一性について (Table 3-1, 3-2)

保健体育学科では、「自己斉一性・連続性」で1年生が2年生より高い傾向にあった。しかし、「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」「対自的同一性」「心理社会的同一性」では差が見られなかった。

児童教育学科では、全ての項目で学年間の差はなかった。

「その2」の学部学生の結果では自我同一性で差が見られたのは、4年生と1年生の間であることを考えると、短期大学の1年生と2年生では自我の確立にそれほどの違いは現れないと思われる。

人間関係能力(社会的スキル)について (Table 4-1, 4-2)

保健体育学科、児童教育学科ともに学年による差は見られなかった。この結果は「その2」による学部学生の結果と同様である。「その2」ではこのことを「今回の調査で用いた社会的スキルの測定項目は、個々の社会的スキルの熟達度を測るものというより、個人の性格特性としての側面を尋ねるような項目であるといえるため、学年別比較による差が見られなかったのではないかと推測される。数年の間に性格が大きく変容することは少ないためである」と考察している。

	1年生 (N=118)			2年生 (N=117)			全体 (N=235)			t値
	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	
社会的スキル	58.24	9.41	116	57.89	9.55	113	58.07	9.46	229	0.284 n.s.
東女体大への同一視	20.14	5.88	117	20.31	6.57	115	20.22	6.22	232	0.215 n.s.
東女体大の仲間同一視	6.89	2.25	117	7.27	2.35	114	7.08	2.3	231	1,266 n.s.
東女体大生意識	4.07	1.58	117	4.23	1.76	115	4.15	1.67	232	0.719 n.s.

Table4 - 1 社会的スキル・東女体大への意識の尺度の各指標に関する学年別集計 (保健体育学科)

	1年生 (N=174)			2年生 (N=158)			全体 (N=332)			t値
	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	平均値	(SD)	N	
社会的スキル	58.57	10.83	169	59.04	10.19	153	58.27	10.54	322	1.252 n.s.
東女体大への同一視	18.19	6.84	171	18.61	6.03	154	18.39	6.47	325	0.581 n.s.
東女体大の仲間同一視	6.55	2.12	166	7.19	2.45	155	6.86	2.3	321	2.504 n.s.
東女体大生意識	3.48	1.72	172	3.4	1.59	156	3.44	1.65	328	0.434 n.s.

Table4 - 2 社会的スキル・東女体大への意識の尺度の各指標に関する学年別集計 (児童教育学科)

#### 4 愛校心(本学への同一視)について (Table 4-1, 4-2)

保健体育学科、児童教育学科ともに「本学への同一視」「本学の仲間への同一視」および「本学学生としての意識」、全てについて学年による差が見られなかった。

保健体育学科と児童教育学科を比較すると、本学への同一視において保健体育学科の方が1・2年生ともに児童教育学科よりも高い傾向がある。このことは、女子体育大学である本学に在籍するということが、体育を専攻する保健体育学科の学生にとっては意味のあることであるが、児童教育学科の学生にとっては本学の学生であることに意味を見出せていないと思われる。しかし、児童教育学科では保健体育学科と比較して「本学の仲間への同一視」で1年生より2年生が高い傾向にあった。児童教育学科では大部分の授業が学年のクラス単位で行われており、このことが仲間意識を芽生えさせる要因になっていると思われる。

また、「その2」では学部学生が「本学の仲間への同一視」で1年生より2・3・4年生と上級生になるにつれて強くなることが示されたが、同じ体育を専攻する保健体育学科の学生にはその傾向は強くなかった。仲間への同一視は、単に大学への在籍だけでなく、部活動を通して培われ、2年間という時間の短さと同時に近年保健体育学科の学生の部活動への参加率が低下していることも影響しているのではないだろうか。

以上より、入学してきた学生には「入ってよかった」と思えるような愛校心を高めるための試みが必要であること、それに加えて、特に児童教育学科を目指す高校生にとって、本学が魅力ある存在となるようなカリキュラム等の改革が必要であることを示していると思われる。

#### <引用・参考文献>

・大石千歳・浅見美弥子・奥野知加・渡辺博之・若山章信・今丸好一郎・中本哲 2007 東京女子体育大学学生のライフスタイルと健康に関する調査報告 その2:精神的健康に関する基礎調査 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学女子体育研究所所報, 1, 23-31.